

病理学第二教室

当時教室員は僅に梅田薫教授と傭人深堀ハツエ、角田セキの両氏のみであつた。

被爆時の状況

梅田教授は病理講堂で学部二年の講義中で爆死。角田氏は教室玄関前の防空壕の外で爆死。深堀氏は病気の弟を疎開させる為田舎に出かけていて難をのがれる。

故梅田教授略歴

正五位勲六等医学博士 病理学教授

明治三十六年二月東京府に生る

大正十五年三月東京帝国大学医学部卒業

同年四月京城帝国大学助手に任ぜられ病理学を専攻す

昭和四年十月同大学助教授に任ぜらる

昭和十一年五月病理解剖学研究のため欧米に留学

十三年七月帰朝す

昭和十六年八月日本大学医学科教授となる

昭和十九年七月長崎医科大学教授に任ぜらる、陸軍高等官參等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い、死す

主なる研究題目

鉄代謝の形態学的研究

死亡者の官職並びに氏名

官 職	氏 名
教 授	梅 田 薫
傭 人	角 田 セ キ

原爆当時の病理学教室

若 原 猛 夫

慌しい様な、夢の様な日を送つてゐる内に、もう十年が経つてしまつた。あの日教室に出勤していた人々はすべて、建物と共に消えて行つた。この文を書いている私は、その三ヶ月半許り前、幸か不幸か、赤紙召集を受け、九州戦線の第一線薩摩半島の西海岸で、あわれな見習士官として、手の施し様のない程蔓延していた赤痢の防疫業務に追われていたばかりに、家族共生命永らえているわけで（当時自宅は城山町の川端にあつた）運命は分らぬものである。幹事よりの命により筆をとりはじめたが、毎日と忙しく施療に追われていて、一向に稿想をねる暇がないので、まとまりのつかぬ文になることゝ思うが、不悪御諒承願ひ度い。尙、原爆当時は不在で、遅れて大学に帰つて来たため、当時の模様は色々の人々、殊に故竹内教授（病理学）の未亡人より聞いたことの受売りであることを御断わりして置く。

当時のことを書く前に、少し遡つて教室の模様を述べることにする。

病理学教室は、基礎教室が南北に三列に並んでいる内の一番西側の列の真中、北の解剖両教室と南の法医学教室との間に挟まれた木造建で、一部だけコンクリート二階建、その南端の講堂が、今の基礎教室の玄関、事務室のあたりになる。その廊下つなぎの建物の中に、第一、第二教室と大陸医学研究所改め東亜風土病研究所（現在の風土病研究所の前身）の病理部病理学科が合世帯をしていた。第一、第二教室共、原爆二年前頃は、夫々十名位の教室員をかゝえ「主任教授は夫々故竹内清教授と吉田富三教授（現東大教授）であつた」賑やかに、又盛んにアルバイトやスポーツにいそしんでいた。吉田肉腫が見つかつたのもこの頃である。それが昭和十八年暮頃になると、次々の応召、研究を終えて教室を出て行く人々等で、両教室共夫々半分位或はそれ以下になつてしまつた。その頃迄には朝鮮出身者も故郷に引揚げた。

東亜風土病研究所は当時臨床部が編成されていなくて、病理部のみ（主任は病理学の金子直教授）、その中に病理学科と細菌学科（細菌学教室内に間借りして、主任は現在の細菌学の青木義勇教授——当時助教授）があつた。病理学科には丸吉氏が唯一人助手として勤めて居られたが、その応召後は金子教授と、ラボランティン二名という淋しい陣容であつた。

昭和十九年になると、木村男也教授が南方に軍嘱託として出られて缺員中の東北帝大病理学教室に吉田教授が赴任されることが決定した。当時の第二病理の医局は、佐々木仁一君（現在山形市開業）と私の唯二人、もう一人の牟田義男氏（現在矢上町開業）は既に応召して大陸に渡る前

で、久留米の部隊に属していた。そこで相談の結果、佐々木君が仙台へ吉田教授について行き、私が長崎に残ることになつたが、その佐々木君も吉田教授の赴任される一ヶ月前途に応召してしまつた。吉田教授は昭和十九年七月に赴任され、八月に後任梅田薫教授を日本大学医学部から御迎えした。当時の病理学教室の蔵書は単行本、叢書、雑誌何れもよく揃つていたので、東京時代文献を探そうとすれば、態々四谷の慶応大学医学部か、本郷の東大に出かけねばならず、大いに苦労されていた梅田教授は手許に充分の文献を持つて大喜びで、着任早々早朝から深夜迄大いに張切つて研究にいそまれた。十一月になつて、私が、缺員中の第二病理の助教を拝命することになつた。

時が経つに従つて戦争は益々深刻になり、長崎の上空には度々大村への往復のB29の編隊が見られ、その度毎に空襲警報で防空壕に待避を余儀なくせられた。併し長崎市は昭和二十年八月一日迄は、極く軽度の空襲を受けたのみで、何事もなく過ぎて行つた。

婦女子に竹鎗訓練をさせた断末魔に近い軍隊は、医師を出来るだけ戦線に引出すため軍医予備員志願を奨励した。そのお手本として大学の教授が二十五日間の軍医予備員の教育に志願したのもこの頃であつた。（教授は召集されないが、他の人々は志願を強請され、続いて召集を受ける破目に陥つて行つた。）昭和十九年の第五次教育（同年は全部で五回）では九月から十月にかけて、本学から法医の国房教授と生理の清原教授が参加され、昭和二十年の第一次（二月施行）には病理梅田、生化学内野、婦人科内藤などの若手の諸教授が（確か五名と思う）が参加された。この内、内野豊生教授は在當中流行性脳脊髄膜炎に罹り、当時未

だ日本人は殆んど知らない、そして軍隊だけが漸くにして作り上げたベニシリンを（角尾学長がさる筋から入手して居られた）用いたが效なく、遂に亡くなられた。

この様にして昭和二十年を迎えたのであるが、四月十五日夜私が令状を受け福岡の部隊に応召したあとは、第二病棟は梅田教授と二人のラボランティン（深堀・角田両嬢）だけになつてしまつた。この頃は第一病棟も講師の筒井氏が三菱病院に勤められ多田君（講師）が古屋野外科に出て、町田氏等も応召され、最後に残つた原田君も私の三日程後に応召し、残りは竹内教授、保野正之助教授と二人のラボランティン（小野・岡田両嬢）だけになつた。その他両教室に共通に所屬している写真技師高谷重雄氏、掛図や実習標本担当の秋紅中村繁治画伯、小使兼解剖助手の井手口貞市・田川甚蔵両君、それにデーサンの小使の山口末三郎君と若い小使の池田等君（夜学に通つていた）がいた。研究所の方は金子教授と二人のラボランティン（平山・草野両嬢）、以上がその後原爆時迄の病棟の全員で、こうなつては日常の講義や研究に事缺くわけである。

その内に、沖縄や南洋諸島からの本土空襲は回数が増して来て、警報の出ない日は殆んどない様になつた。従つて警報発令中は全員業務を放つて防空壕に待避し、学生（学部四学年、附属臨時医専四学年、それに附属薬専の三学年も居る）の講義は殆んど進展しない様になる。併し長崎市内は極く軽度の爆撃を蒙つただけで殆んど無傷に近かつた。それ故空襲を軽視したためか、警戒警報発令時は講義を続行する様になつたとのことである。又一方大学の財産、殊に図書や研究資料の疎開も考えられ、いくらかは佐賀県鹿島のあたりに持つて行つた。

一方火事を最小限度に喰い止めるために、建物の間引きも考えられた。そして病理教室でも廊下を切離したり、小使室を毀して取除けたりした。品物疎開に就いては病理は殆んど参加していない様である。（終戦後病理の疎開荷物として我々の手元に戻つて来たのは、二、三台の顕微鏡だけであつた。）と言うのは、曩にも述べた様に、病理学教室には鉄筋コンクリートの二階建の建物があり、二階は竹内教授室と図書室並にその別室があり、一階は顕微鏡標本の格納室と結核動物の実験室の二室から成つていた。そこで疎開する代りに色々な品をこの建物内に押込み、窓はすべて外からトタン板を張つて、その外に赫土を塗つて置いた。これならば普通では類焼しなかつた筈である。

こうゆうことと併行して、人員疎開も次第に行われた。浜口町の高台に居られた梅田教授は大草のあたりに疎開され、御自身は殆んど教室に泊り込みで、時々大草に帰られた様である。保野助教授は城山町に住んで居られたが、母堂を送つて一回、更に令室令嬢達を送つて、何れも島根県迄往復された。この引越が少々無理だつたためか、以前から治療して居られた胸の病が重くなり、時には休んで静養される様になつた。竹内教授は御宅が鳴滝のシーボルト宅趾のそばだつたが、別に疎開されようという動きは無かつた様である。唯、教室員が減りかけてからは、昔から取扱つて居られたテーマ「結核」を、更に深く研究のために、時々佐賀県中原の傷痍軍人佐賀療養所（現在の国立佐賀療養所）に泊りがけで出掛けて病理解剖や実験に当られる様になつたりした仕事上の無理が、戦時中の栄養不足や直接菌を使はれたことなどと重つたためか、遂に御自身も結核症に罹られ、原爆当時は鳴滝の自宅で臥床されていた。金子

教授は矢張り人員疎開迄はして居られず、先づ荷物疎開のため、病理で
取除きの運命に遭つた小使室を本尾町の奥、金比羅山の麓のあたりに移
築中であつた。

この様な処に八月一日、長崎市も空襲され大波止その他が被爆、大学
も直撃弾を受けて、外科の手術室、婦人科の教授室・図書室・手術室あ
たりが目茶々々になり、看視の学生が一、二名死亡したと聞いている。
こうなると大学も入院患者の内、軽症者など退院させて余り残つていな
かつたそうだ。

この様にして、運命の八月九日を迎えたわけである。当日教室に出勤
していたのは、梅田教授と高谷・中村両氏、小使の山口・池田両君、ラ
ボランティンの小野・岡田・角田・平山・草野の五名で、原爆の時には
梅田教授は病理講堂で学部二年生の講義中、学生と共に即死された。

他の人々は教室玄関前の防空壕の中や外にいて、ひょうきんな中村氏
がラボランティンを例によつて笑わせていたと聞く。其処へ原爆一閃、
何れも強烈な爆風で追しひしがれ、つゞいて起つた真空状態にもまれ、
建物はつぶれ、病理教室が頼みにしてゐた鉄筋コンクリート建は、建物
自体にひびが入り、その上、壁や天井に凹み迄出来ている。従つて窓を
塞いだ赫土やトタン板など一瞬にとび去り、つゞいて木造建の処々から
同時に発火、遂に病理学教室は全部焼けてしまつた。勿論コンクリート
建の中味も同様で、不燃性の金属、陶器、硝子などの残骸があちこちに
残在してゐるが、何千度の灼熱にあつてすつかり変質し、もろくなつて
いた。位置も爆風ですつかり変つていた。図書室の蔵書も高さ三、四尺
もあろうという灰の山と化し、又竹内教授の蔵書で珍らしい多数のコレ

クションも同様な運命に遭つた。

この日竹内教授は自宅で病床にあつたため生命を拾われたけれど、そ
の後重症の金子教授の令息仁君（次男で五・六才？）を預られ、その夜
を徹しての泣き声で教授は不眠となり、病勢が悪化された。後、大学が
大村海軍病院の施設を利用する様になつて、そこに入院された。併し終
戦直後のことで、今の様に進んだ治療も出来ず、昭和二十一年四月十九
日大村病院の病室で亡くなつた。

丁度その四日前の十五日は、GHQからサムス大佐が大村に乗り込ん
で来て、一方的情報に基き、医大を十五日間の猶予で、大村病院から追
出して諫早（現在の分院）へ移る様にと、全く残酷な命令を出した日で、
我々は涙をのんでこの命に服し、引越しの準備をすると共に、諫早に行
つて研究、診療、講義に必要な器械、薬品その他の英文リストを占領軍
に大至急提出すべく大重の最中であつた。竹内教授としては、大学が去
つて後大村に一人残されるのは心細いことであられたに違い無く、そん
なことが精神的ショックとなつて寿命を縮められたのではないかと思う。

金子教授は、前にも書いた通り、建物疎開で取除けられた教室の小使
室を買つて、荷物疎開のため金比羅山の麓に移築中であつた。当日も末
の坊ちゃん（後日竹内教授宅に引取られた）を連れて現場にあり、小使
の井手口・田川両君と、それに井手口君達の近所の人々の応援で、完成
真近かであつた。その仕事の最中被爆し、夫々痛手を受けた。そこで、
まだ元氣であつた金子教授は、大学から救護班を連れて来ると言い残し
て立去られ、そのまゝ戻つて来られなかつた。後に国友名譽教授が金比
羅山の中腹から山道伝いに西山水源地の上手の方に行かれる途中、力尽

きて水を求めている金子教授に会われたが、後刻その姿を探しても見当
らなかつた由で、どこで亡くなられたか不明である。令息は間もなく竹
内教授の御宅に引とられ、火傷のため昼夜泣かれた。その後元氣になり、
その内佐世保の教授の令兄の許に引取られてあつたが、二十二年はじめ
肺炎で亡くなつた由である。教授の御宅は浜口町の高台への登り道、今
の原爆公園を見下ろす位置にあつたから無論その御家族は全滅である。

教授と一緒にいた井手口君はそのまゝ亡くなつたが、田川君の方は奇蹟
的に助つている。屋根と家との蔭にいたさうであるが、その後元講師の
筒井先生（当時三菱病院）に手厚い治療を受けたためであろう。一時は
起き上ることも出来ずにいたが、その内に元氣を恢復し、目下長大本部
勤務の文部技官として大工坂の筆頭である。原爆で全家族を失ひ、又授
精能力をも失つたのではないかと心配していたが、その方は健全である
ことが後継の出生により立証され喜んでゐる。でも尙原爆症は治りきつ
ていない。

も一人助かつた幸運者は第二病理の深堀ラポランティンで、病氣の弟
を疎開させるといふ従姉（元第二病理ラポランティン）の伴をして田舎
に出かけていた。保野助教授は、家族を島根県へ帰えされた後は、上野
町の故永井教授（物療科主任、当時助教授）の御宅に下宿され、当日は
自室でねて居られた由で、そのまゝの姿で遺骸が見附かつてゐる。原爆
は全く困つた武器で、被爆時即死しなければ暫くは症状が現われない。
従つて本人は思い思ひの方向に行動する。そして、その内に、中には間
もなく、中には大分時間を経過してから、症状が現われて遂にはどこか
で、従つて被爆時と全く別な処で、息を引とることになる。然かも、当

時近くにいた人々、即ちお互が誰であるかの証人は殆んど生きていない
ので、他の土地から来た親戚の人々には、その遺骸を探す伝手が無い。
即死した人でも、あの猛烈な爆風で元と位置が變つてゐるから始末が悪
い。こうゆうわけで、当時のことも色々聞いたが、その伝手のない人の
ことは薩張り詳しいことが分らない。高谷老と他のラポランティン、山
口君及び池田君のことは聞及んでいない。中村秋紅氏のことは、夫人が
助つていたので少し分つてゐる。即ち秋紅氏は被爆後、長年に出出しに
行つてゐる夫人を迎えに行き（同日夫人が汽車の切符が手に入つてゐる
から一緒に行つて欲しいと頼まれたが断つてゐる。元来夫人が病弱であ
つたからその身体を心配して迎えに行つたものらしい。）途中で遭つて
共々御船蔵町の自宅に戻つた。帰り着いて見ると、大学から逃れて来た
令息が壕の中で発病して呻つてゐる。その内には秋紅氏も症状が現われ
て、教日の間に二人共相ついで亡くなつた。竹内教授の御家族も、梅田
教授の御家族も、幸にして皆無事であつた。

その他教室関係の人々の内原爆に関係のある方では、当時県庁に勤め
て時々第一病理に来て居られた奥田氏は、城山町に住んで居られ、家族
を亡くされたが、現在は浜口町の大学の下に開業して居られる。竹之久
保の長崎病院に勤務して居られた岡部準四郎氏（第一病理）は、同病院
をやめて家族共々故郷に一旦引揚げられたが、原爆の時は折悪しく、単
身荷物引取りに竹之久保に来て居られて被爆し亡くなつた。筒井前講師
は平戸町の自宅が道路拡張のための強制疎開にかゝり、城山町の小学校
下に越して来て居られた。同氏は病院に出勤して無事であつたが、家族
は駄目で、重症の夫人が防空壕の中で「あなたは私の病氣を治せぬのか

「と恨み事を述べられたとの憐れな話を聞いている。多田前講師は既に古屋野外科に移っていたので助かった。以上が当日の教室関係の被爆者の模様の概要である。

当時のことは教室以外の人のことも色々聞いたが、あれから十年近く経つと、漸く記憶も薄れかけた。爆風で倒れた家が、直ぐでなく、暫く合間を置いて、而も火の気のない処から、一せいに発火するなど全く想像も出来ないことである。こうゆうことも聞いた。法医の国房教授が山木事務官と共に爆風で倒れた木の下敷になつた。そして、どちらかゝ先にこの木の下から抜け出たなら、必ず他の一人を助け出すことをお互に約束し合つた。その内、国房教授だけがどうやらぬけ出すことが出来たものゝ、力尽き果てゝどうにも出来ないでいる内、その木は燃え始めて事務官はそのまゝ亡くなり、教授は興善町の自宅迄担架で運ばれ、後に亡くなつた。又、本尾町のある被爆者の処では、皆が枕を並べてねている。その内症状が悪化して来ると、患者は急に床の上に立ち上つて、そのまゝ枕を倒す様にドスンと倒れる。かういうことを繰り返す様になるともう駄目で間もなく死んで行く。沢山いた家族が一人一人この様にして次々と亡くなつて行くのに、何一つ施す術もない。無為にこうゆう有様を見せつけられる生残りの家族の心の中は如何だつたらう。これらのことから考えると、原爆とは何とゆう残酷な武器だろう。非戦闘員を全くのなぶり殺しにするわけで、いつそ一度に息の根をとめる武器の方が余程ましだと思ふ。原爆当時の苦しみを全然知らずに、おこがましくもこんなことを述べて、亡くなつた方々には誠に申し訳がないが、伝へ聞いたことであつても、それを出来るだけ忠実に書き残すことも、生

残つた者の義務だと考え、敢えて拙文を御目にかける次第である。長崎を離れて田舎に住い、又資料も殆んどなくて、事実を確かめる術もないが、記憶の糸を辿つて、教室の人々のことを出来るだけ充分書こうと努力してみた。

私は昭和二十年末になつて大学に戻り、先づ大村海軍病院内、次いで諫早、長崎へと教室と共に五年余りを暮らした。大村時代或は諫早時代殆んど零に等しい設備で、それに終戦前に比べれば、換算して、約十分の一位の僅かな教室予算しか与えられず、いつになつたら教室は元に戻るだらうかと心細い思いをしていた。その間、林・松岡両教授を迎え、或は臨時医専の廃校・附属薬専の九大移管問題、初代学長候補交渉や同窓会の寄附募集などに駆け廻つたり、講義や研究の材料をかき集めたり、嬉しいこと、悲しいこと、苦しいことの連続であつた。それでも年月の経過と共に復興は一步一步進み、十年目の今日は大学も教室も先づ完全に近い機能に復活してゐることを非常に嬉しく思う。原爆前に比べると、図書その他はまだ〴〵お話にならないが、併し別な点では近代化して今の方が勝つてゐるとも言えよう。あと五年乃至十年したら、又更に充実して、終戦直後のことは夢にも想像されぬ様な時代にならう。唯学内を眺めてみると、あの頃一緒に苦労した人々は、一人去り二人去り、現在は極く僅かしか残つていないのは、少々淋しい感じである。原爆十周年に当り、被災された方々の事を拙い表現ながら書きとゞめ、その御冥福を祈り上げると共に、再建の跡著しい大学の今後愈々の御発展を望んで筆を擱く次第である。

(昭、三〇、五、二七、於世知原)

思 い 出

岡 本 生

当時、学二武田学兄（現病理学教室、高津学兄に語りし言葉）の言に依れば『八月九日は梅田教授の学部三年にたいしての病理各論の開講日であつた。病理教室の講堂は満員で「一般に人間の心臓の大きさは、ほどその人の手のこぶし大で」と語られた。その瞬間、閃光あり、学生一同教授の顔をみつめ、教授も学生を見渡された。瞬時にして教授の背側にあつた防火壁が倒れかゝると同時に教室全体が倒壊し、学生は机の下に潜り込んだ。教室は発火し、一部の学生は側壁の板のわれ目より脱出した。』とゆう事です。これが梅田教授の最後の御様子だと思われませんが、その後の消息は不明です。また武田学兄も典型的の原爆症で亡くなられました。

法 医 学 教 室

八月一日の空襲により、当教室も落岩による被害があつた。尙當時の教室員は国房二三教授、徳川武夫助教授（内地召集中）と技術嘱託の山口与作氏、雇の黒川マツ子、傭人の吉田マサエの各氏であつた。

被爆時の状況

国房教授は教室で被爆、翌日小児科の地下室に救出され其後桜馬場町の自宅で加療中、十六日未明死亡される。

他の教室員も教室内で爆死す。

故国房二三教授略歴

正四位勲四等医学博士 法医学教授

明治三十四年五月十六日福岡県に生る

昭和四年三月東京帝国大学医学部卒業

昭和四年四月京城帝国大学助手に任ぜられ法医学を専攻す

昭和六年五月京城帝国大学助教授に任ぜらる

昭和十五年七月長崎医科大学教授に任ぜらる

昭和二十年五月陸軍高等官二等

昭和二十年八月九日大学に於て原子爆弾に遭い同月十六日鬼籍に列し歿す

主なる研究題目

A B O 式血液型の亜型の研究